

ひることになつたもので、漢文化を攝取しながら、それよりも一層發達進歩した組織を案出することになつたのである。こうして便利な國字が國語を寫す爲に普通に使用せられるやうになつたことが、かの王朝時代に於ける國文學の大發達に至大の關係を有したものであることは、またこゝに詳述を要しないことである。但し假名の使用せられるやうになつてから後も、漢字の使用が熄まず、今日に於ても漢字廢止や制限の議論が行はれてゐる情態に在るのは、必ずしも假名が國語を移すに不便であるが爲ではなくして、國民の間に於ける學問、教養としての漢字知識の歴史的因襲的發達から考へるべきことで、こゝに述べるところとは別個の問題である。

さてこの有様をまた他の東亞諸國に於けるそれと比較して見よう。これ等諸國の中、支那文化の影響を受けて自らの文化を進歩せしめると共に、民族的自覺の下に独自の文字を案出したものは少くはない。例へば契丹即ち遼、女眞即ち金、タングート即ち西夏の如きはそれで、各々漢字とは別に自からの文字を發明して使用した。然るに此等の文字は漢字に倣つて作製せられたのであるがその出來上つたものは漢字よりも更に一層複雑なもの、もしくは漢字を僅ばかり變改して自己の文字と稱した類に過ぎないのであつて、改良よりも寧ろ改惡ともいふべく我が假名のやうに進歩發達した組織を有する便利なものではないのである。彼我を比較して考へる時、吾人は深く我が祖先の睿智と明敏とに敬意を表し、感謝を捧げなければならぬ次第である。

文字について述べたのに關聯して更に國語について考察して見よう。一體國語は國民精神の外に顯はれたものといふべきでその亂雜や、滅亡は即ち國民精神の亂雜滅亡を意味するものに外ならぬ。我が國語はそれ自身の中に於ける變化發達こそあれ、日本民族固有の言語として開闢以來今日に至るまで能くその命脈を傳へ、外來文化の爲に